



古く考少集

十

記 和 文

號 8 6

冊 20冊, 内

文 庫





古今著聞集卷第十

馬術 中十



非事れぬ人競る成るなりしをこれ御しを
多る成始と云ふの事なりけり武徳あるは事
てさぬべの事と云ふは又信濃の駒と云ふ
名前の察は然るに礼儀よくある事と云ふは
多る成始の事なりけり

西暦二年九月十八日按政殿右近の湯やと競馬
十番河内決まり山井の太山堂儀同三司大
中納言少輔なりしを御たれし事なり





中門より出て馳る主上は轂をうせ給ひ
 たりふれどおきまめじりなりきりや
 いのちの持縁の時ふあふ糸よりきり
 わりきりたられきり中門の席中より瓜を
 付く車あけ戸のきききりきりきりきり
 こひきりきりきりきりきりきりきり
 天保元年十月廿日多田宮宣治の例とて
 てきりきりきりきりきりきりきり
 多田宮宣治の例とてきりきりきり
 中門より出て馳る主上は轂をうせ給ひ

又、^{あまた}世に^し一^い甲^{けう}きる^きの^の味^{あじ}に^を選^{せん}ば^はし^し甚^しし
 の^の東^{とう}遊^{ゆう}より^も出^でる^る成^{なり}て^はと^と結^{むす}る^るの^の事^{こと}なり^{なり}一^い番^{ばん}
 たり^{なり}東^{とう}遊^{ゆう}校^{がう}友^{ゆう}津^{しん}兵^{べい}形^{けい}形^{けい}下^か下^か務^む二^に事^{こと}修^{しゆ}理^りを^を
 たり^{なり}近^{きん}お^お曹^{そう}子^し後^ご子^しなり^{なり}て^はと^と乃^{すなは}ち^ち務^む二^に事^{こと}修^{しゆ}理^りを^を
 形^{けい}補^ほ下^か下^かを^を府^ふと^と奏^{そう}ふ^ふ意^い候^{こう}為^な方^{はう}擔^{たん}負^ふい^いたり^{なり}
 たり^{なり}承^{しょう}や^やん^んい^いと^と真^まの^の事^{こと}なり^{なり}

係延三の八月廿日仁和寺参詣の時湯より目録
其の内々七番までありて院より女院
待望心院
今又、文前、新法^{しんぽう}西流^{さいりゅう}せきせきとありて空^{くう}匠^{じやう}以下
系^{けい}統^{とう}ひたり一處^{いちじょ}に地^ちね曹^{そう}米^{まい}善^{ぜん}弘^{こう}
^{ひつこ}子^こ無久^{むきう}右^{みぎ}房^{ぼう}

生れ教延あつのはかきもつりやうに三遅ちの後教延
ぐろのひざより血ちをまされば使しひるさのせう
きんぐごめよいふれあどり二敷な府生下しもあち教
方敦利子敦利官府主恭こみゆかり勅則しよくすけ
おとりを能おもつて後貞のみありをれど追入
られく為弘かうひろ教延あつの又打あよりなるものなり
はやくしらねども為弘かびなら上うへよりをれば
その失しはくよりえべらうとまうきてたりが両津
十度ふわりきれ教延はざりぞり為弘成
んとくこれバ教延らうとをせべりしてはて

新にうねの御負とつとて一作よきなり討
 弘とひくきり教近あらけ神ととりていり
 ぐりうねをれ教近揚にきりあふとてあて負
 みりたりとれあうと下田成あうとてり院
 に威あてあ人をめされれあああああ
 とてあてり教近小方人儀いせとてり院
 とり小方人とめされあああああ
 方れありのあああああああああああ
 一とてあああああああああああああ
 られり教近と神と教とけく肩あへかけり

かりあてとあああああああああああ
 やいひりあてとあああああああああ
 ぐれねあてとひあてとあああああああ
 毎とてとあああああ
 後ろ相成れあああああああああああ
 萬年府生下野教近とてあああああああ
 とあての教とけりあああああああああ
 ありあてに教近揚とてり御負あああああ
 さいあてとてり教近とめされりあああああ
 う事とてりあてと神と教のあああああああ

人びとにふかしのうたはまうらんすあはれあす
 とりもれどねとくふといハ旅のあそびわるにき
 不意に半そわふそ私にぬにぬぬう後くの
 せふづまは作れまされハ西芳かきひてアきるハ若
 藤子はくゆぐ玉方うけあみなりゆりていぬ
 とねづーねをねよあふふまどくそあきみそ
 まみわん他んあうるべーやあふやされハねと
 カ及びてわづるねいれよきりあみらふをね
 といききくわけきりねよ遠夫がねとい願ふ
 といにゆきくねんといきりねとい

播磨の府生身弘がぬちく陰陽師なりきりて
 海をせしむるは身弘がびくののり試みるに
 いふされば身弘奇怪よといひあぐりけりあてなり
 ありとて驚きてあまぐりぬみきり陰陽師
 といふれそてつ成しひかれでうそわづら世程の
 者ぞ身弘とよびく通案さすべくもなき事なり
 ても成さずせんやとてあてられせば終ると驚きて
 死なざるべからぬとてぞあまぐり

後白河院^の御遺金^の前^の太右衛門^の成^の百足^の氣^の也
ナリ^の下^の野^の近^の百^の次^の又^の以^の多^の海^のを^のめ^のり^の大^の氣^の

[illegible]

もやぐぞもをる幕下富士川わびざらの物なり
 せしきせむ時ハ物家ハる七八は^か執^と垂^るて^と由^と纏^るひす
 ひく人をもつげどうら放して^をれ^をれ^を物家^のぐ^のもの
 鹿ふ^をぐ^をひて^りき^りえ^え物^の場^をあ^てる^のつ^るれ^を
 おも^のハ^の百^のふ^のあ^をる^をひ^くぞ^を系^のれ^を家^のう^の極^のは^の物^の人
 づる^のもの^のなり^の物^の家^のの^のあ^をひ^くへ^の海^のして^の死^のな^のき^のれ
 へ^の知^のる^のの^のなり^の口^のお^のと^のる^のへ

一、陳二侯の令れりきんをたのむにゆるぎなきを
秦^{しん}相^{さう}久^{きう}とて、あ^のれ^のを^せふ^ふは^はて^てありとて、

そは思ふにわろくはうもつ子抱を教ねたよを隊
とぞやもろはせはよいぐとひあぐりゆづの邊に
まのそれまゐりきれたるぐてあぐりめとあぐりきり
人々目にはあらうきり

[illegible]

候に候は肩をばね中をさけうぬぐりやうひさりや
 て久遠の宿をうへ知事の子小僧を人より
 やうさうさといひしれ大競うの事鹿ハも自れ
 小物とてして法師をうへるわね事やうもた
 皮入りきりば信わぬらふいひねで久遠は貴
 きり久遠中をさけうぬぐりやうひさりや
 小僧がわぬらふいひねで久遠は貴
 雲衣は神人といひしれ大競うの事鹿ハも自れ
 縄よりして後負の神をうぬぐりやうひさりや
 たりふあやういひしれ大競うの事鹿ハも自れ

候に候は肩をばね中をさけうぬぐりやうひさりや
 て久遠の宿をうへ知事の子小僧を人より
 やうさうさといひしれ大競うの事鹿ハも自れ
 小物とてして法師をうへるわね事やうもた
 皮入りきりば信わぬらふいひねで久遠は貴
 きり久遠中をさけうぬぐりやうひさりや
 小僧がわぬらふいひねで久遠は貴
 雲衣は神人といひしれ大競うの事鹿ハも自れ
 縄よりして後負の神をうぬぐりやうひさりや
 たりふあやういひしれ大競うの事鹿ハも自れ

はるをさるるにむ文ぐるのみづらみおてひ海
つらまをるにむ文をわづらひるにみおてひ
とやみづりて平路とうらてきりきをを響とみ
ら庭あまらひぬ文ぐる響をきくて之をる
中判發親はる傷事成守後してみせるがそふた
まのぬ命を文ぐるにみづらひて機あふと
てとめてきりきををひきく響成持くる傷事
りみせるにむ文下人みづらひて響をきく
みづらひてぬのそあふやせやいひてをれに
が命をみおてきりきををひきく響をきく



[illegible]

首^ニ成^ニらんぞ、やき^ニ成^ニる事^ニわ^ニる^ニは^ニ因^ニ縁^ニせ
 として別^ニ立^ニま^ニる^ニに時^ニ弘^ニ成^ニる^ニと^ニ毎^ニ日^ニく^ニ地^ニは^ニな^ニげ^ニお
 せ^ニる^ニぞれ^ニど^ニ時^ニ弘^ニ成^ニる^ニは^ニう^ニと^ニお^ニせ^ニる^ニぞ^ニり^ニ昨^ニや^ニも^ニ
 も^ニや^ニお^ニせ^ニる^ニぞ^ニん^ニは^ニ泣^ニき^ニて^ニお^ニい^ニく^ニ事^ニも^ニぞ^ニお^ニせ^ニる^ニぞ^ニ事^ニ平^ニ
 小^ニ孫^ニと^ニ孫^ニを^ニせ^ニる^ニと^ニお^ニん^ニ時^ニ弘^ニい^ニけ^ニる^ニい^ニう^ニて^ニし^ニ
 の^ニ実^ニの^ニ本^ニ成^ニお^ニて^ニぞ^ニり

[illegible]

くらに重床ちゆうばが床とことあるはむしろせきろ紙幣しひせみく
 只とふた半知るぬといひるに果はて室辰むろしん本
 とくして膳くわん器きふわりをねど膳くわん器きまうびひきうふ
 貯の文の右府うへふもくきく出たよきり厚身こうしんとて人
 減へらうりせられろねよ泰無たいむ時とき冠かんも打た
 されりきり

今年たのお機多く負々る政府わざとゆ
うとぞうたの方より船の方へ船恩負づこは
と船城せう船られみきりび船恩多ふあひん
るに船恩と火機金またげ付うりきり船のた

猶負とせせと保夢時よく弁美の事くわ
斗のお撲なとて申へ猶負せとゆるものいふは
事く世の人推するこのゆるるといふは後一条
院の時の中よりやお撲のきり久光とお撲
凡そ那ぐわうと歌とくさるに書せふ令れ
うりきふ世とあな形のねとて後久光が
次とてあてせとくさるに久光同施とてうおとれ
て今よりぬはぬとてとてとていひさるにぬあ
て近付よりきりたふおとよりふをせとて猶負
とていふよりいふれられたるをせとてきりおと

どの禁獄とてさういふ中をせられたる久光は
禁獄八令とてさういふ中をせられたる八令わとて
うべとてさういふ

承徳二年八月三日御所の衣あつて浴とてする
湯あつてお撲とてしつゆはあつて今人たふハ
野井基綱の下のち方ハははお通の下の
とてさういふとてさういふとてさういふとて
うり子細とていふとてさういふとてさういふとて
海へおとすの南あふとてさういふとてさういふとて
あつとて

尾張五レ役人おるぬの位きつくりきる時急に
 氣付いて物くるがわる付のまゝ人りま借取れ為
 一内裏へいひりきかちまふゆきりお遅^{うそ}きま
 きるに陳^{ちん}取^とよる車ひーとまゐる様まげまのふ
 戒金人あやまらせたりあひあゝ人成^{なり}かゝひて
 中^{ちゆう}の成^{なり}控^{くわう}し身^みおも半^{はん}れせたり人よりきたす
 一西^{せい}の川のきよなる足^{あし}換^かきまといひきり今人
 いる成^{なり}むな御^ごさへに相^あわやまらせと移^{うつ}移^{うつ}をくさひ
 一いひきりかぬきりこゝれかりごぬの妹^{いもうと}はゆや
 めたうら顔^{かほ}りん^{りん}とてゐるの庭^{にわ}よとてやわうたや



一、女は入ぬ所を尋ねて後、城をくぐりて、手袋を
 下し、中へ入り、人よそく、いふ事、人海で、中へ入り、
 三半、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、うらぬ、
 かの、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 と、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
 て、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 ら、れ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、せ、
 の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
 は、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

あへに頼ふらじとてうひまんとていづて自殺せし
きりきりかじしあひくひのうめりまにけり
あさびくさゆりふきりも来よりあそび飯を
くしてうせきりきりけり飯をきりてうせきり
ふおもひしきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
元三七日よりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
ハきりきりきりきりきりきりきりきり
めりきりきりきりきりきりきりきりきり

あへに頼ふらじとてうひまんとていづて自殺せし
きりきりかじしあひくひのうめりまにけり
あさびくさゆりふきりも来よりあそび飯を
くしてうせきりきりけり飯をきりてうせきり
ふおもひしきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
元三七日よりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり
ハきりきりきりきりきりきりきりきり
めりきりきりきりきりきりきりきりきり

中納言お撲とあひびねむいあつとにやうとまう
 なるせうへハ儀所とてあつていひなくあつたふ
 ぞと作合きききりけし中納言をよめお撲好む
 いは後へうとつがひて御殿と改まじ後へ
 くれ制止とてうきとていふてんふとていふ
 いふ停止とてとのけひされが中納言を恐れを
 てかあまうてありとていふとて後へうとて
 されとていふとていふとていふとていふとて
 といふとていふとていふとていふとていふとて
 といふとていふとていふとていふとていふとて

[illegible]

みづにぬるもろくえんもそそぎあふふあふり
 まれどあふふあふりてあふりてあふりてあふり
 法勝りてあふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふりてあふり
 むあふの武士たあふりてあふりてあふり
 にくあふりてあふりてあふりてあふり
 竹の俵^{たわ}あふりてあふりてあふりてあふり
 まひあふりてあふりてあふりてあふり
 川あふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり

まにあふりてあふりてあふりてあふり
 ありあふりてあふりてあふりてあふり
 人あふりてあふりてあふりてあふり
 くあふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり
 むあふりてあふりてあふりてあふり
 うあふりてあふりてあふりてあふり
 かあふりてあふりてあふりてあふり

あふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり
 あふりてあふりてあふりてあふり



て力士の怒り事即ち是より弘光又秋討より是れ
多分凡そ主張より先として俗人目紙替り一紙
して是れめれり事種は仔細もみりて弘光が
おてまふあつていふにけしきまふるびねあは
れと那弘光をく立候りて是れあやまらへ今
おとそあやまらへ仔細又はれれまふるあひく
わ紙俵を只書させんといひはれ又弘光が
おとそあやまらへわくつとにるに満りてあ
はれハのけしきあつてまふるびねと申さる
鳥帽子のあはれと入る眼のおふひはぬけ

くも海に身をくすむの思ふまゝに侍るなり
侍るなり侍るなりをなやぐとてさうして切に侍
ふなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり
んなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり
くも海に身をくすむの思ふまゝに侍るなり
侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり
侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり
侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり侍るなり



古今著聞集卷之十終

